

齋 藤 修

『商家の世界・裏店の世界』

——江戸と大阪の比較都市史——

リポート 1987.10 210 ページ

練り上げられた推理小説(「都市史」)を読むような感じで、本書を一気に読み終えた。組み立ての大胆さと、展開の明解さを備えているという理由だけではない。何よりも、極めて限られた証拠(近世都市の「データ」)から出発していることが、そう感じさせるのだ。本書は状況証拠を嫌う。確かな事実を見定め、つなぎ合わせ、1つの仮説を導き出そうとする。けれども、何が事実として確定されるのか。例えば、「これまで意外なほど問題にされ」なかった住込奉公人が、なぜ証拠となるのか。さらにそれらが、どのようにして組み立てられ、仮説にまで展開されるのか。〈比較〉という方法によってである。推理は比較によって支えられている。これが本書の魅力でもある。

近世都市の不確かなイメージの暗闇のなかに、明らかな事実が1つ1つの点として確定されてゆく。点と点をつなぐ技法が推理であり、そこから意味を引き出す方法が〈比較〉なのだ。夾雑物がなく明解だ。時に傍証があっても、思い入れはなく、あくまでも冷静である。もちろん方法としての〈比較〉は、5つほどの複数のレベルで駆使されている。ペースとなっているのは、西欧の経験との比較である。西欧の都市化(さらには近代化)に関する事実発見をバネに本書が成り立っているといっても過言ではない。何よりも、住込奉公人という事実への注目が、P.ラスレットらの提起を受けたものにほかならなかった。同様に導きの糸となっているのは、現代日本の都市状況との対比である。二重構造や内部労働市場

というカテゴリーは、現代日本に関する社会認識の成果を抜きにしては考えられない。そして3つめに、農村の動向との比較である。これがプロト工業化論を踏まえていることはいうまでもない。4つには、本書の副題でもある江戸と大阪の比較である。

最後に、大阪と江戸を中心としたデータが、それぞれ相互に時系列に比較され、さらに近代というより大きな時間の単位とも対比される。興味深いのは、本書を読んでいると、時間の単線的な流れが一度解体され、〈比較〉という系列作業のなかに置き換えられているかのように感じられることである。「比較史」という副題には〈比較〉によって「歴史」を再構成しようという、前書『プロト工業化の時代』と共通する方法的な野心(「社会科学の冒険」)が込められている。

さて、本書は6つの章から構成されているが、骨格となっているのは3つの章だと考えることができる。「奉公人のゆくえ」と題する第2章で、事実の発見と確定がおこなわれ、つづく第3,4章で、労働市場と結婚市場の視点から、事実の理解とともに仮説が提示される。他の3つの章は、仮説の意味を浮かび上がらせるための導入と比較と展望である。本書のなかで最も注目され、かつ全体の展開の要ともなっているのは、第2章の事実整理と分析である。以下、3つの骨格を紹介したうえで、いくつかの事実について印象を述べてみたい。

まず、1700年前後と幕末・維新期の町方奉公人の消長が、人別改帳等の資料によって対比される。前者では、奉公人人口比率も20%前後を中心に、世帯当り奉公人数も1人を中心に分布していたが、後者になると、都市別あるいは町別に、「二極分化傾向」が認められるという。すなわち、大阪(さらには京都)のほとんどの町と江戸の極く限られた町では、奉公人人口比率が20%を上回り、世帯当り奉公人数も1人を越えているのに対して、江戸の多くの町と大阪の一部の町ならびにその他の城下町等においては、奉公人が数量的には皆無に近い存在となっていた。このような二極分化が引き起こされるのは、18世紀末からであることが確認され、時期と現象にたいして2つの認識枠組があてはめられる。「都市化が退行した」プロト工業化という時代像と、都市社会の二重構造論である。

つづく第3章では、これまで見出された興味深い事実が、「雇用構造上の変化」によって説明される。それは、「内部労働市場の形成」と「雑業者化」(ないしは「臨時雇用化」)という都市労働市場の二層化を含むものであった。前者は、主として大阪の大手の「慣例」とおして

描かれる。「大規模化」かつ「多部門化」した大手の経営は、熟練の内部形成を、さらに内部昇進制を必要とするとともに、次第に奉公期間の長期化した封鎖的な雇用制度を形成した。大阪の場合、このような奉公人雇用が拡大し、「無視しえない割合」にまで達したとされる。後者は、江戸の就業構造に占める「雑業」から推定される。雑業とは、「小商」「捧手振」「車力」そして「日雇稼」等の職種であり、これらの「雑業層」の規模の拡大が、年季奉公人の「短期契約化」や「日雇化」の進行と結びついており、これらの関係の調整機能を口入屋が担っていたとされる。いうまでもなく、本書のタイトルの「商家の世界」とは、大手の「内部労働市場」のことであり、「裏店の世界」とは、「都市雑業層」の比較的開放された生活世界のことである。

以上のような「雇用構造」の二重化が、都市人口の再生産にどのような影響を与えたかが第4章で考察される。大阪の大手においては、内部化された雇用制度によって、結婚市場が閉鎖的になるとともに、結婚年齢が大幅に高くなり、その結果、出生力は相当低くおさえられた。18世紀後半から大阪の人口が減少するのは、このためであるとされる。これに対して、住込奉公人の大規模な「雑業者化」がおこった江戸においては、流入人口による家族形成と定着化の可能性が高まったものと想定される。性比の著しい改善、そして江戸出生者割合の高さは、この事情を傍証しているし、何よりも、19世紀中頃までつづく江戸の人口と世帯数の微増傾向が、「雑業者化」仮説のダイナミックな性格を裏づけている。このような定着と家族形成の傾向が、「潜在的には都市の出生率水準を引上げる効果」をもっていたことが示唆されるとともに、やがて、出生率の「顕在」的な上昇によって、近代都市の人口転換につながってゆくことが暗示される。評者にとって、「雑業者化」仮説は、近代の都市下層の背景を考える上でも、忘れかけた「プロレタリア化」という言葉を想起する意味でも、とても興味深かった。

大阪にみられた奉公人制度の拡張は、内部労働市場化をもたらすとともに、結婚年齢を引き上げることによって、「意図せざる結果」として、直接的に出生力を制限した。これに対して西欧の場合、経営の拡大にもなって、「外部労働市場への依存」が高まり、アプレンティス制度そのものが動揺した。一部のブルジョワ層にみられる産児制限は、労働市場の動きとは無関係に、もっぱら「意図的」に実施されたという。他方、江戸にみられた年季奉公人制度の弛緩は、西欧に比べて「はるかに急速で、ドラスティック」な雑業者化をもたらした。西欧の

アプレントイス制度ほど、職人層にたいして強固な影響力をもたなかったからだという。ここにいたって、〈比較〉の焦点が奉公人〈制度〉に絞込まれそうになるが、今後の方向としては導き出された2つの仮説が、大阪と江戸というそれぞれの個性豊かな都市史の場面で具体的に検証されるべきだと思う。

さて、本書を読んで感じたことは、大阪と江戸ではデータの密度が全く違うことである。大阪の方がはるかにデータが揃っているし、想像をめぐらす素材にも事欠かない。例えば、道修町三丁目と菊屋町の場合、およそ150年の間に、世帯数が半分以下に、借屋層に限れば3分の1近くにまで減少している。この地域が衰退したわけではないことはもちろんだが、この点は、労働市場からだけではなく、地域の性格と景観の大きな変容を含めて論じる必要がある。そのことは当然、大阪の中心部と周辺の「町統地」との関連を今少し明らかにすることを要請する。また、幕末・維新における奉公人性比の改善と、男子奉公人の大店への偏りは、著者の手法からすれば、奉公人の男女別「給金」等の動きとの対比が期待されてよい。

江戸のデータは、ほんのわずかな点にとどまっている。最も大きな変化は、性比が1743年の171(町人人口501千人)から、1867年の102(同じく540千人)へと顕著に改善されたことである。著者はこれを奉公人の在り方から説明しようとしているが、奉公人のみの性比ならともかく、江戸町人全体となると、かなり無理があるように思われる。1743年の奉公人の割合が極端に高くなってしまふからである。奉公人以外の説明要因も考えられてよい。振り返ってみると本書では、奉公人を除いた残りの世帯の性格、具体的にいうと親族世帯の規模(同居人が含まれてしまうが)には、あまり関心が払われなかった。例えば、城下町の平均世帯規模(奉公人を除く)は、単純平均すると3.6人から4.4人に拡大している。また、幕末・維新时期で世帯規模(除奉公人)を比較すると、江戸の4.0人にたいして、大阪は3.3人(いずれも単純平均)である。さらに四谷伝馬町以下の江戸5ヶ町に限ってみると、子供数が平均1.5人と少なく(大阪の上層に近い)、単独世帯比率が10~15%と高いにもかかわらず(以上、南和男『幕末江戸社会の研究』)、平均世帯規模(除奉公人)は大阪を上回り、1920年の東京市3.8人をも上回っていた。これらの数少ないデータを、資料批判を含め、どのように読んでゆくかは、今後に残された興味ある課題であろう。

本書は近世の都市への大胆な冒険、「アイディアと問

題提起」の書である。100年以上前の日本の都市像は、まだまだ闇の中という感が深い。灯火によってかえって闇の深さを感じたというべきかもしれない。本書は、門外漢にも、近世都市への冒険心をかきたててくれる。

〔中川 清〕